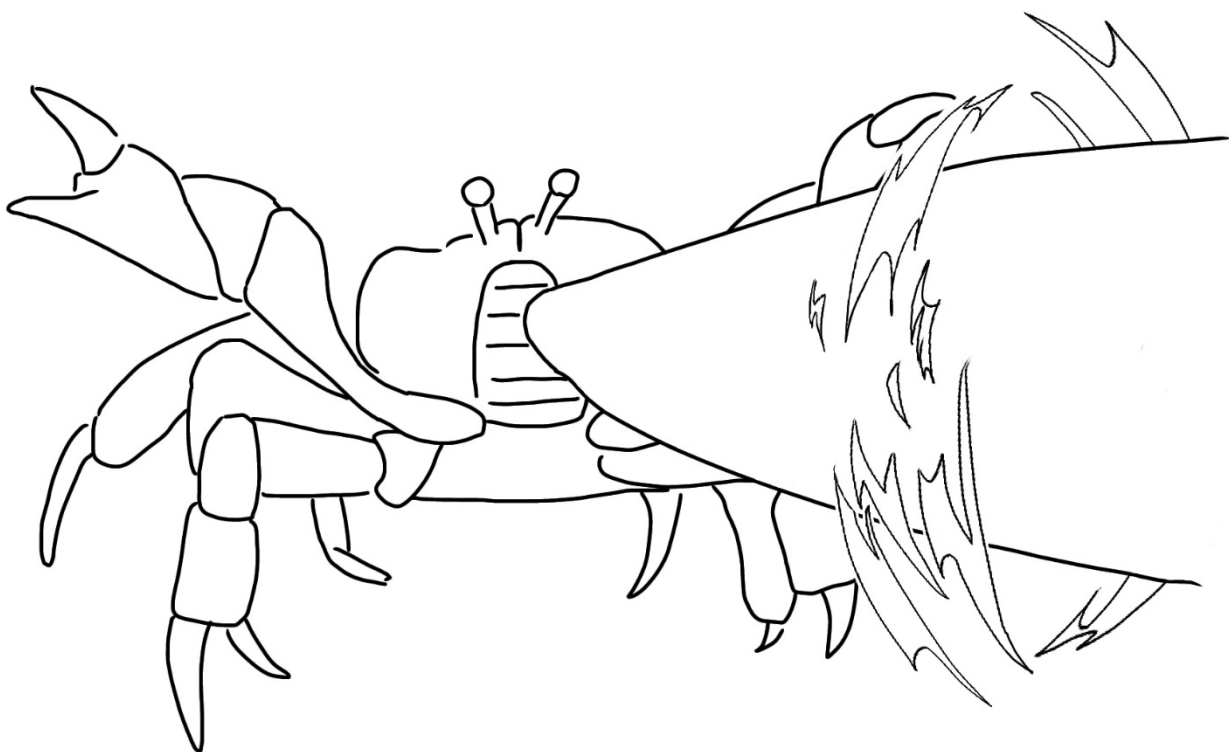


雑誌

タラバガニ

創刊号



目次

タラバガニ創刊の趣旨	加藤湊人	3
ハウ・ツー自己承認	ちえけら	5
「縛り」という楽しみ方	23 日生まれ	10
キャパシティーの中で	松本 智博	13
灘校の社会的な価値について	？	17
名作配布の意義	加藤湊人	21
「突き抜けていること」について	さぼてん	27

本冊子の記事には、執筆者個人の考えが含まれていることをご理解ください。

タラバガニ創刊の趣旨

編集者 加藤湊人

「いったい何なんだこの意味不明なサークル名は……」

「特に意味はありません」

ついに雑誌「タラバガニ」の記念すべき創刊号を迎えることができました。といっても、創刊号以前も無ければおそらく以後もないだろうという悲しい雑誌なのですが。

とりあえず、まずは「タラバガニ」の由来からお話しましょう。

冒頭にもある通り、意味などありません。文化祭を見て回るお客さんは、ブース名からどのようなブースなのかを判断していると思いますが、「タラバガニ」というどう頭を捻ってもサークルの趣旨が全く理解できないサークル名にしたことには理由があります。それは、僕たちが「タラバガニ」を立ち上げた理由は、一言では説明できないほど込み入った話だからです。それゆえ、この場を借りて説明しようと思います。

僕は新聞委員長をやっている関係上、いろいろな分野で活躍している灘校生と話すことがあります。彼らの話とはにかく面白い。数十分の取材をしただけで、一人ひとりが持つ独特な人生観に惹

きつけられてしまいます。ただ、人生観というのはすごく抽象的なもので、文章に表すことは至難の業ですし、そもそも取材では彼らの深い人生観の表層をぬぐうことしかできません。どうしても新聞という媒体で伝えることができる情報は限られてしまいます。きつと、学生という短い期間でしか存在し得ない人生観もあるでしょう。それが失われてしまうのは耐え難いです。

そこで、僕は考えました。人の人生観を他人が感じて表すという構造が問題をはらんでいるのなら、本人に書かせてしまえばいいのではないかと。そのために用意した媒体が雑誌「タラバガニ」です。

といっても、あなたの人生観を書いてくださいと言われて書ける人は相当めずらしいでしょう。なので、彼らの人生観の方向性がわかるような文章を書いてもらうことにしました。具体的には、社会や学校などの様々な場所の問題に対して、彼らの立場から個人的なアプローチをしてほしいとお願いしました。

なんとも曖昧で掴みどころのないお願いですが、記事が出揃った現在、僕は間違っていないかと確信しています。まあそれは、読んでもらって実感してもらうことにしましょう。

ただ、惜しむらくは人数です。ただでさえ多忙な灘校生ですし、僕もそこまで人脈と人望があるわけではないのですが、もう何人かは増やせたのではないかと後悔があります。

しかし、何事も最初から全てうまく行くわけではありません。ポジティブに、この方法が間違っていないということが実証されたと捉えましょう。僕はこの文化祭が灘校での最後ですが、違う場所でも似たようなことをもっと盛大にやりたいと思います。また、この趣旨に共感してくれた後輩やその他の人は自分なりのやりかたでいいので、周りの人の人生観を何かに残してもらえれば、とても嬉しいです。

・追記

展示の方も力を入れているので、よかったら見ていってください。

ハウ・ツー自己承認

ちえけら

承認欲求は大きな呪いです。ときに創作の原動力となりますが、ときに心身の不調につながることもあります。

承認欲求において、承認してくれる他者を自分にしてしまえばいい、というのはごく簡単な発想です。自分を自分で承認してあげれば、そこには永久機関が完成したといっても過言ではないでしょう。

私は私が大好きです。好きで好きでたまりません。もしこの世界に自分ももう一人いたとしたら結婚したいくらいには大好きです。そんな私は、日々自分をちまちまと肯定することで幸せに生きています。多趣味なもので、思い立ってはこまごまとしたものを手作りするのですが、自分にとって素晴らしいと思える作品ができたとき私は私を手放して褒めちぎります。

だって私が私の創作欲求を満たすために作ったものですから、それはもうドンピシャで私の好みなわけです。そのとき、私は無上の幸福を覚えます。具体的には、近くに誰もいないことを確認したあと奇声をあげながら廊下を駆けまわります。嬉しくてたまりません。

そうやって私は、日々を幸せに生きています。この度、タラバガニなる組織から「普段からお前が考えていることを吐け」と言われたのでこうして筆を執っています。別に私の考えを誰かに理解してもらいたいわけでも実践してもらいたいわけでもないし、所詮はガキの青臭い戯言と唾棄してもらっても構いません。流石にけちよんけちよんに貶されると傷つきますが、もしそうなったのならそういうことなのでしょう。

私は自分の考えを文字に起こすのが面白そうだと思ってこの文を書いていきます。要するに自己満足ですが、よければお付き合いください。

自分で自分を承認するにあたってまず行わなければいけないのは、自己否定です。疑問に思うのももつともです、これから自分を褒めようというときに自分を否定するのは矛盾した行動です。説明します。

自己否定、というのはぶっきらぼうな言い方で、私はこの精神行動を「負けを認める」と呼んでいます。相手、あるいは人でなくともいいかもしれません、何かと相対した時に相手を自分より優れていると認めること、ある点においては自分は相手に勝てないことを自覚することです。目安は口に出して言えるくらいです。

「負けを認める」という行動には「自分にはできない」という自己否定と、「相手は自分より優れている」という他者承認の二面性があります。

自分にできることはそんなに多くない、自分は大した人間じゃないと認めることが、この「負けを認める」ことのキモになってきます。他者承認はオマケです。

自分は何でもできる、自分は他人より優れていると思っているうちは、自分を実際より大きく見せようとしてしまいます。それでは自分の輪郭を把握できないのは当然でしょう。もつとタチが悪いのが、このタイプの自己肯定はそれが欺瞞であることを忘れてしまいがちだということです。初期のころは背伸びしている自覚が、他人にちよつとでもよく見られようとして大口を叩いている後ろめたさが無意識のうちにあるものですが、その夢を見続け、自分に嘘をつき続けているうちにそれが本当の自分であったかのよう錯覚してしまいます。そして嫉妬、自己嫌悪、焦燥が視界を狭めます。まあ、上質な人生とは言い難いでしょう。

ここで最初の話に戻りますが、自己承認は、自己否定を前提としません。

承認欲求は他者から認められたいという呪いです。他者承認より自己からの承認に重点を置いたとき、ここに他者から受けとる

承認の量と自分で充足できる承認の量の大きな差が発生します。

なぜか？他者からの承認、それは言い換えれば不特定多数からの承認です。考えてみれば不思議ですよね。我々は他人に認められたと思っていますとき、無意識のうちに複数人からの承認を必要としているのです。これに対して、自分一人から得られる承認の量は一人分、自分自身であるというハンデを加味してもせいぜい二人かそこいらです。一億だの七十億だのには到底及びません。じゃあどうやって自分一人ぶんの承認の量で満足するか、ここで自己否定がはたらきます。一億人から承認をもらうためには、簡単に言う和一億人に優越しなければなりません。つまりは自分が不特定多数からの承認を得たいと思っていますとき、具体的に万バズしたいと思っていますとしましょう、それは言い換えれば自分は一万くらいに優越しているだろうと無意識に思っているわけです。この傲慢さが満たされない思いを生み出します。

自分は誰にも優越できないとはじめから思っていると、万バズをあきらめることができます。そして、もともとゼロだったところに自分からの承認が得られるので、非常に嬉しくなるわけです。

自分は何でもできる、本気を出せばもつとすごいんだ、真の実力はこんなものじゃないと思っているうちは自己承認が承認欲求を充足しません。ハリボテの虚栄心で自己を覆い隠し、自分に目を向

けずに夢を見てはいいつまでも飽きたることがありません。自分は大した人間ではないということ、自分にできることはとても少ないことを認めて初めて、自分の輪郭を把握することができま
す。それは正確な自己評価につながり、深遠な自己分析による的確な反省とともに最小限の満足で幸せに生きる第一歩となります。

ここまで来て、「なんだ、大層なこと言っているが要するにハードルを下げているだけじゃないか、マイナスからスタートしたらちよつとの前進でも大きなものに見えるって、そういうことだろ？単なるごまかしじゃないか」、そう思われた方もいるでしょう。それについて私ができるのは、私は何もできない自分を肯定することを選んだということです。私が是とするのは私が楽しいと思えることなので、日々自分を褒めてあげる方が楽しく幸せに生きられると思ったのです。この文章を読んで、あなたがどうするかはあなた次第です。私はそれに関与する権限を持ちません。

ところで、負けを認めることのもう一つの効能、他者承認ですが、これは単純に相手の実力を心から認めることで人間関係が円滑になるよという、それだけのことです。もともと負けを認めるというのは昔の私が人間関係について考えたときに思いついたものです。孫子の兵法にも「勝ちすぎはよくない」と書いてあります。全てに

勝つ必要はないのです、ちよつとした欠点があるとき、人はそれを愛嬌と呼ぶのではないのでしょうか。

承認欲求は嫉妬につながります。対して、きちんと相手の力を認め、心からの称賛を送ったり自分が嫉妬していることを認めたりできるとき、そこには健全な承認の形があります。負けを認めることは、一見自己否定に類しネガティブな精神活動のように思えますが、言い換えれば他人の力を認めることと同義です。他者を認めることは、健全な人間関係にもつながります。

実態を伴わない自己肯定、自分はもつとできる、自分の実力はこんなものじゃないという自信は、不要な責任まで負ってしまいます。自分にできることの限界を見極めたとき、不要な荷物をおろし、いくつかの責任から解放されます。またそれは同時に、他人の力を信じることに繋がるため安心していくつかを任せることができます。

話は逸れますが、これはSNSや世論に対する付き合い方にも通じます。他人を認め、信じることができるようになると、「どうせ自分の意見くらい、誰かが言ってくれているだろう」という考えに立って、センシティブな話題に対しても過度に熱せられすぎず適切な距離を持って相対できるようになります。

別に自分の意見を持たなくていいということではありません。

あなたの言葉が必要ですと言われたときには遠慮なく言えばいいし、心のうちにでも自分の意見を持つておくことは社会をよりよくする一歩です。ただ、やりすぎなまでに議論に口出しし、自分が意見の中心になりたい、自分の言葉をより多くの人に聞いてもらいたいという欲求を持つことは基本的にストレスのもとになります。極端で人の対立を煽る議論に巻き込まれてしまうのは何者かの思うつぼですし、知らず知らずのうちに大きなストレスがかかっています。「何かやってんな、ほうほうこういう議論なのか、俺はこう思うな、でも俺の意見ぐらい誰でも思いつくし、既に誰かが言ってくれているだろうな、じゃあいいや」こういうスタンスで論争なり炎上なりを眺めるのはとても楽です。

もちろん、ここで私が提唱した「自己否定から始まる自己承認」には欠点もあります。

自分の外部に対して独立しているため外からの影響を受けにくいっほう、全責任を自分で負わなければいけないという重圧が発生します。

他者承認を目的としていたときは、「時間が足りなかったから」とか、「機会がなかったから」とか、「やっぱり時代が追いついていなかったか(笑)」などと言い訳ができましたが自分からの承認を

目的とするとそうはいかなくなります。このときに目指すべきゴールは単純明快です、ズバリ自分が満足するまでです。逆に言えば、自分が満足してくれないときは自分の努力不足が原因であるとはつきり示されてしまいます。いいねの数を気にしなくて良くなる代わりに、自分からのいいねが死活問題になります。

また目標を高くしすぎたときに自己承認の仕組みは破綻します。自分にできることを見極めながらほんのちよつと高いハードルを設定しなければなりません。

もちろん成長するためには自分の実力よりやや上のハードルを設定することが推奨されます。そのハードルを飛び越えたとき、自分は自分に惜しめない拍手を送ってくれるでしょう。心身ともに一体なわけですから、自分の感じた感動、称賛、尊敬の念は何よりもダイレクトに自分に伝わります。ここに最強の幸福があると、私は思っています。

ハードルを下げたとしても、それは別に問題ありません。「生きているだけで偉い」というのはその最たる例です。毎日生きているだけで偉い、そう褒められて毎日幸せ、それも自己肯定のひとつの形ではないでしょうか。

この自己肯定の仕組みは自分自身の中で完結し、他人は感知できない精神活動なので別にいくらハードルを下げようがカタツム

りの速度で成長しようがいつこうに構いません。絶対的な指針は自分が満足するかどうかのみであり、自分に嘘をつくことだけが禁じられています。

あるいは、創作物を外部に公開しない可能性も高くなるため、才能が埋もれる危険性もあります。

また、仕事や部活など他人と協働することがらにおいては適用できません。これは重要なことです。端々やこまごまとした場面で自己肯定することはあるでしょうが、基本的には求められた役割を遂行することが第一目標になります。幸せを求めるのは結構ですが、決してそれで他人に損害を与えてはなりません。私の言っている自己肯定は、言ってみれば単なる自己満足に過ぎないことに留意してください。

さて、ここまで長々と私の脳内を垂れ流しにしてきましたがまだ荒削りでロジックも明快にできていない感が否めません。そして、この論はここ数年で私の中に生えてきたものなのでまた年を重ねれば考えも変わるのでしょう。それもまた楽しみではあります。

最後になりましたが、拙文をここまで読んでくださった皆様、ありがとうございます。

「縛り」という楽しみ方

23 日生まれ

【著者紹介】

23 日生まれ

77 回生。地学研究部所属。ちよくちよく文章を書いてはいるものの、文章力は余り無い。読書の方が好き。

【「縛り」とは？】

皆さんは「縛り」なるものをご存知でしょうか？

別に物体を紐状の何かで纏める動作について訊ねているわけではありません。というか、この文章で出てくる「縛り」は別に物理的に縛ることを指してはいません。

この文章で「縛り」は、何かを為すときに自ら制約を追加で課することを指します。そして今回はこの「縛り」の魅力について語ろうかと思えます。

……わざわざそんなことをする必要はない？何でしなくてもいい負担を自ら追加するか分からない？

確かに、効率のみを求めるのなら「縛り」は百害あって一理なしでしょう。

しかし、しかしです。人間は時に非効率な行動をし、時に無駄を愛します。いわば「縛り」は趣味のようなものです。だから頭ごなしに否定するのではなく、そういうものもあるんだなく位に思っておいて欲しいです。

とはいっても、今の時点では皆さんは「縛り」の意義も楽しみを知りません。なので次は「縛り」のメリットについて説明したいと思います。

【「縛り」のメリット】

「縛り」には案外多くのメリットがありますが、全てを書き出すのは流石に骨が折れます。

なので、皆さんが共感はともかく納得出来る位には整理して行こうと思います。

①達成感を得られる

「縛り」をする最も大きなメリットとして、達成感を得られることがあります。

敢えて負担を増やしてハードルを上げた上で達成したときに得られる満足感は、普通に達成したときよりも多いことは明らかでしょう。

達成感とは少し違うかもしれませんが、自ら「縛り」を行って達成できた場合、その過程が困難であればあるほど自信がつけます。

もちろん「縛り」と関係なくなくかしら困難なことを乗り越えれば自信はつきやすいのですが、わざわざ「縛り」をした上で達成できたとなれば、他の人に対してもそうですがまず自分自身に対して自慢出来ます。それが出来れば自ずと自信はつくでしょう。

他でも同じことが言えますが、ここで重要なのは自ら進んで「縛り」を課すことです。

自分で「縛り」を課すことで、「自分で決めたからやりきらなければいけない」と強く思え、又、自分で決めるからこそ、自分の限界付近になるように「縛り」が課せます。

他人に強制される「縛り」は達成感が自分で決めた場合より少なくなりがちで、達成に対して貪欲になりづらく、そして何と言っても自分で達成出来ないことが往々にあります。

皆さんも他人に強制されるより自分でやろうと思ったときの方が、達成に対して意欲的になった経験はあるだろうと思われます。
宿題とか

② 技能の習熟

「縛り」はそもそも技能がある程度習熟していないと厳しいものがあるのですが、「縛り」を通して技能を習熟させることも出来ます。

例えば、何かを実行する際に「自分で決めた制限時間内に終わらせる」という「縛り」を課し、それを達成できれば、同じことを次実行する際に自然と早くそれを実行することが出来るはずです。

もちろん一概に技能が習熟するとは言えませんが、少なくとも同じ縛りを課す際に役に立たない道理は無いでしょう。

③ 適度な緊張感の付与

「縛り」の内容にもよりますが、ときに失敗の代償が普通よりも大きいことがあります。それ故、適度に緊張感を得られ集中力が高まります。

又、「縛り」を破らないようにするということが念頭に置かれるので、普段あまり意識していないことに対しても注意を向けるこ

にも役立ちます。ルーティンや願掛けもいわば「縛り」のようなもので、主にこの効果が働いているだろうと思われます。

他の人が「縛り」をこなしている（ロープ渡りやゲームのRTA等）を見ると、自分には関係がなくなると自分も興奮しているときがあるのも一緒になって緊張感を得られるせいでしょう。

【日常での「縛り」】

最後に、皆さんに「縛り」に慣れ親しんで欲しいので、すぐに試せる「縛り」を紹介します。

とは言っても、「縛り」は他人に言われてするようなものではないので飽くまでも提案ですが。

うすうす気付いている読者さんもいるでしょうが、今回オススメするのは「ルーティン」です。これも「日常の動作の中に一つ動作を追加する」という点では「縛り」に該当します。

先程の章の③でも述べましたが、ルーティンには普段あまり意識していないことに対して注意を向けることにも効果があります。

実用的なルーティンでは、「出掛ける前にガスの元栓を閉めてから服を準備する」や「鍵を閉めた際にはスマホのメモに施錠したことを記述する」等があります。

これらは少し手間ではありますが、すぐに慣れられる程度ですし、出かけた先で気掛かりになっても服やスマホを見ればちゃんとこなしたことが分かるので実用的な範囲かな、と思います。

それではこの文章もここでお終いとさせていただきます。そして、ここまで読んでくれた読者さん達に感謝申し上げます。

とはいえ、恵まれた立場にあるのも事実です。この時、このような問いが浮かんできます。私たちは下駄を履いているのではないのか。東京大学や京都大学といった最難関大学の入試を突破しても、その大学で学ぶに値しない生徒であるのではないか。

先述しましたが、点取り虫になるのは、ある意味で簡単なことなのかもしれません。視野を狭くし、ひたすら他人を蹴落とすことばかりに照準を置けば、おのずと勉強に身が入るでしょう。成績が上がり、（ずいぶんと嫌味な言い方ではありますが）「灘校生のポテンシャル」があれば、最難関大学・学部への切符を手にすることは決して難しくないのかもしれませんが。東大合格への最短ルートを整備し、それに基づいて圧倒的演習量を半ば強制的にこなすことで知られている鉄緑会のカリキュラムについて行ければ、東大合格など決まったようなものでしょう。しかしこれには、ある意味での頭の悪さが要求されます。もつと高貴な勉強はないのか、もつと意義のあることはないのか、そういった疑問を持たない能力こそが、膨大な課題を黙々とこなすことに重要なのです。

確かに基礎学力は大切です。大学という高等教育機関で学ぶ上で、私もそれが足りていないことは自覚していますし、それを研鑽するための1年間で、「受験生」としての1年なのだと理解しています。しかし、そこで点取りテクニクに走ることが有用であり、

みながみなそれを行っている中ではそれをしなければ大学入試を突破することが難しくなっている、このことが私の中で板挟み状態になっているのです。

しかし、これは意外なものが解決してくれそうです。それは、私にとっては闘争本能だったのです。灘校から東大、京大、医学部以外のところに進学すると、「落第者」のレッテルを貼られてしまう。このことが私を奮い立たせているという側面は否定できないのです。そして、身近な上級生が大学に合格しているのを見て、「私でも行けるのではないか」と思えてくる。動物としての本能があるが故社会のシステムに飲み込まれていくというのは、皮肉ながらなかなか興味深いところです。人間の生得的な本能を上手く利用できるようなることこそが社会科学の進歩なのだと、つくづく感じさせられます。

さて、話を变えますが、大学入試の近年の難易度上昇は、誰のためになつていのでしょうか。もちろん、社会科学だって、科学技術だって進歩していますから、その分大学に入るまでに求められる基礎学力の水準が上がるのも当然の帰結であり、それ自体は社会の進歩として評価されるべきだと思います。とはいえ、決められた時間内で、高校範囲という箱庭の中で、1点でも高い得点を目指す。そうやって日本の将来を担っていくであろう若者が、あまり生

産性が見受けられない大学受験競争―あえて形容すれば質の悪い科挙、になってくるんじゃないか―に向かって言っていることが、もはや社会全体の損失なのではないかとまで言えてしまう気がします。

とはいえ、希望の光とも言える要素がないわけではありません。それは、科目数の増加・学習内容の増加と、日本における学歴の重要性の低さとです。

なぜ前者がいいのか。一見すれば受験生の負担を増やしているだけのように思えるかもしれませんが、実際のところ、受験というのは相対評価なのですから、結局勉強量に違いは変わりません。以下に得点を増やすかが、難関大学への進学という「利益」に繋がります。それなら生産性のあることをやった方がいいわけです。単語数が増えた！と大学入試改革の時に騒がれたのを覚えていますが、よく分からない難問への対処テクニックを磨くよりかは、単語を覚えた方がすべての人にとって建設的な競争になることは間違いないと思います。共通テストにおける情報科追加もしかりです。

後者は、利益を最大化する人間のモデルを考えた時、必ずしも受験戦争に全ベットすることが利益を生まない、という社会になっているということです。社会的に成功するうえでも、受験一辺倒よりかはいいわゆるところの「非認知能力」を育てた方がいいでしょう

し、そもそも社会で成功すること以上の利益確保、いわゆる「豊かな人生」を実現させた方がいい人だって、今の世界と比較して相対的に学歴を重視しない日本社会では、比較的のんびりと暮らしていくことができます。競争に巻き込まれることを強制されないという意味で、学歴の価値が低くなっている日本社会はいい状態であると言えるのかもしれない。

それにしても、受験勉強というものに、いわゆるソーシャルゲームと近いような快感があることを、最近は実感させられます。ある意味報酬系の奴隷になることが、偏差値を上げるための大圏航路なのです。明確に数値化され、しかもその最後には大ボスとして大学受験というのがある。大学受験にはある程度の自主性がありますから、これは中学受験の方が顕著かもしれません。中学受験時に通っていた塾では、毎週というほどにテストがあり、毎回順位が揭示されていき、しかもそれは勉強という、箱庭の中でやることをしていればいい。しかも中学受験塾のカリキュラムはみっちり決められていますから、ひたすら出された宿題に対して反射的に反応していれば自然と偏差値が上がるわけです。小さな目標から大きな目標まで、スモールステップが上がっていくと言えば聞こえはいいですが、それをただ受け身でして、明確な数値目標を達成することだけに照準を置いているのでは、学問への興味から生まれ

る「学びが好き」とは別の意味での「勉強が好き」であると言えるでしょう。

私は灘校に入るうえで、ソーシャルゲーム的な勉強をしてきましたが、それはあくまで、抑圧まみれの公立中学校から逃れるためであり、抑圧からの解放という、消極的な意味での自由を追い求めて、そのために受験勉強をしたのでした。本質的に勉強は好きではなかったのです。学ぶこと自体は昔から好きだったんですけれどね。

だからこそ、得点競争の社会に飲み込まれていく灘校の空間には、ある意味で不向きだったところなのかもしれません。とはいえ、そのような順位付け、ソーシャルゲーム的な報酬系から逃れる自由もあるというのも灘校の良さであり、私はそれを享受してきました。これこそが、灘校の自由であり、価値の片鱗であると言えるでしょう。灘校の自由については語り切れないので、卒業文集で。

（77 回生以下の在校生の方、ぜひお読みください。気分変えて書かなくなるかもしれないけどね！）

灘校の社会的な価値について

？

これを灘校生が言うとは不快かもしれないが、灘校、というのは世間で注目されやすい学校である。そして、その実態よりも過度に期待が寄せられている学校でもあると思う。そんな灘校は、この日本社会においてどんな役割を担っているのだろうか。灘校が持つ価値はただ東大合格者を多数排出するだけではない、だけであってはないと言われるが、その文脈で語られる灘校の真の価値というのはほとんどが内向きで、社会に対して提供した価値がどのようなものであるかについては未だ研究不足ではないだろうか。

灘校も大きな日本社会の一部であるからには自身の社会的な価値について考察し、それがどうあるべきかということを持つておかないと、灘校の存在自体が既得権益者によるエゴであるとも言われかねないと感じている。この記事が、一般の灘校生、そして来場者のみなさんが「灘校が存在する意味って何？」と考え始める嚆矢となれば幸いである。

灘校の価値として語られがちなのは例えば校風の自由さであって、そこには他者を（やんわりと）認めあう環境や議論を大切にす

る風潮があると説明される。しかし、この校風の自由さというのはエゴであるとも言える。灘校には多種多様な人々が集い、それぞれがいろいろな才能を持っているために互いにリスペクトしあい、多少変なことをやっても認められるユートピアが形成されていると考えているが、この良さというのは極めて内向き、悪い意味でのユートピア（解放されていない場所）でもある。灘校生がそのような環境で育ったからといって、社会をそのように明るくすることにはおそらく結びつかない。灘校の中で議論が大切にされているからといって、それは灘校という環境によるもので、居場所が灘校でなくなった灘校生は議論を大切にするとは限らないのではないだろうか。

更に踏み込んで言えば、灘の価値を十分に理解できなかった灘校生は社会においては正反対の行動をとってしまうのではないだろうか。議論が大切にされる風潮を「自分の意見が通る」と解釈してしまった灘校生は、社会では自分の意見を通すために独裁的なやり方をしてしまうのではないか、と想像した。簡単にすれば、ぬるま湯に浸かりすぎた弊害だとも言えよう。

また、灘の閉鎖性というのは生徒に見識の狭さをもたらす。これはよく指摘されることだが、灘は男子校で、ゆえに生徒は異性との関わり方を学びにくい。また灘校生は多種多様でありながらもある面では画一的で、そこが見識の狭さをもたらしているのではないだろうか。そしてこの見識の狭さは、グローバル化で多様な、それも灘の”狭い”多様さではなくほとんど全ての属性の人間と関わるのが求められる時代に、大変致命的ではないだろうか。

そうであるならば、いつそ灘校は解体して、才能ある生徒はなるべく様々な学校に配置されるようにした方がよい。生徒は開かれた環境で見識を深め、灘校の中に留まるだけではできないような体験をするだろうし、また周囲に同レベルの人間がほばいないという事実が、更なる広い世界へ興味を広げる原動力となるのではないだろうか。またそんな才能ある生徒に触発され、自分の可能性を発揮する生徒も生まれるだろう。ここでもう一つ主張を入れておくと、周囲に影響を与える可能性のある才能を持った人間を一つの箱庭の中に集めるというのは、箱庭の中はユートピアとなるが、そこに属さない人間にとっては自分の”本来発揮されるべきだった可能性”を奪ったという不平等性、暴力性も持ちうるのである。

しかし、未だ灘校は解体されず、ユートピアとして残り続けている。そうすると浮かび上がってくる灘校の価値についてのもう一つの仮説は、灘校は一種の隔離所として機能している、というものだ。一般的なナダコウセイ（ここでの”ナダコウセイ”は灘校に行くような生徒のことで、実際に灘校に属していることを表さない。）というのは、端的にいつて”強い”。強い人間というのはそれだけでリスクとなるが、それだけではなくナダコウセイは大人と協力しづらいという特徴を抱えているのである。例えば特別なピアノの才能を持っている子供は、早いうちからピアノの更に上手な大人のもとで指導を受け、そして大人のピアノリストの社会の中に入ろうとする。政治家の息子は、親を味方につけ、政治の世界について学んでゆく。天才的な野球少年は信頼できるコーチのもと甲子園に行くだろう。いずれにせよ共通するのは、彼らは基本的に親を味方につけており、そうでなくとも周りには信頼できる大人がいるということだ。その条件がある限り、彼らは（少し暴れることがあっても）道を踏み外さず、自分のやりたいことに向かって突き進んでいくだろう。

しかし勉強で才能を持ったナダコウセイというのは違う。勉強の才能というのはいわば未分化の、どのように生きるかが決まっ

ていない才能であり、それゆえ本人たちは自分がどのような道を選ぶかを決めることができない。そして親は、しばしば先回りして子供に医者や弁護士、官僚など、世間的には一度なったら安泰と言われる職業を選ばせようとする。それが気に入らなかつたナダコウセイは、周りに信頼できる大人を持たないこととなる。これは本人だけでなく、社会に悪影響をもたらす。能力の高いナダコウセイたちは、社会に信頼が置けないと感じればすぐに反抗の道を選ぶだろう。それは自分を理解してくれない社会への反抗であり、自分の可能性を引き出してくれない社会への絶望でもある。そしてナダコウセイはグレル。中途半端に高い能力を理解されない哀しみを抱えて。

そこで、灘という隔離所が機能してくる。なるほど、灘は同じような人間の集まりであるわけだから、お互いに認めあつて、平和に暮らすことができる。社会になじめなかつたナダコウセイも、灘校生になれば灘校という偽りの社会の中では、少なくとも居場所を見つけるくらいはできるだろう。そうして思春期という多感な時期を乗り切つた灘校生は、灘のネームバリューという大きなオーラを持つて、社会の大海原へと漕ぎだしてゆくのだ。総括すると、灘はそこに属さないものにとつては不良の隔離所として、灘に属

してとびきりの能力を持たなかつたものにとつては自分の居場所として、類まれなる能力を持った天才にとつては居心地の良いぬるま湯として機能しているのである。

それが良いことかどうかは分らないが、その体制が変わり始めていることは事実である。灘校の指導部はどうやら、自身が生徒にとつてのぬるま湯となつてしまうこと、そして社会にとつての隔離所であり続けることを警戒しているように見える。灘校は生徒に、見識を深めるため隔離所から飛び出して社会を見ることを推奨し、また灘校の雰囲気も、なんでもありの隔離所、という雰囲気が（隠されながらも）黙認されていたのが、変容しつつあるように感じる。そしてこれはなにも職員室にいる指導部に限つたことではなく、どちらかと言えば灘の“当事者”である、生徒会の方で問題になつているように、僕には感じ取れた（これは僕の思い違いかもしれない）。この、灘校の持つ社会的価値の変化というのは、さまざま要因によつて引き起こされ、今後も灘校のありかたに影響をもたらすだろう。僕には、今の灘校がどのように自らを定義したがつているのかは未だ理解できない。しかし大切なのは、内省的に自らの学校の社会的価値について考察し、冒頭にも述べたようにそれがどうあるべきか、どこへ向かつて行くべきかを考え、時

に議論しあうことだろう。ひいてはそれが、真の灘校の自由や、価値というものを理解する助けになるのかもしれない。

最後にいくつか付け足しておきます。読んでるうちに訳分かんないなと思った人は正しいので読み飛ばしてもらって構いません。？といかにもなペンネームを付けておりますが別に偉い人とかではなくただ恥ずかしいので隠しているだけです。文章に””とか「」が多くてすみません。読みづらいですね。傍線部とかに付いているのは悩まされます（身内ネタ）。灘校のことを馬鹿にしたような文章だと感じた人もいるかもしれませんが、別に自分は偉いと思って書いたわけではありません。確かな保証はできませんが。匿名の身分を利用して灘校生にひとこと言うなら「睡眠は大事です!」。それではさようなら。ここまで読んでくださり、本当にありがとうございます!!!

名作配布の意義

加藤 湊人

僕だけ2記事も、それも趣旨だの意義だの意識高いものを書いてしまつて申し訳ないです。ですが、何かしらの企画はただやるだけではなく、趣旨や意義をはっきりとさせて後の人が真似したり参考にしたリする余地を残してこそ完成するものだと思うので、どうかお付き合いください。

「名作配布」は、単純明快、過去の名作を印刷して配るという企画です。おそらく、この雑誌を配っている横で配っていると思います。

過去の名作には、著作権の保護期間が終了しているものを選びました。青空文庫という、著作権の保護期間が終了した作品をネット上にあげ、誰でも見られるようにする団体があるのですが、この企画に使ったものはすべて青空文庫のサイトからコピーさせていただいたものです。フォントと文字のサイズに変更を加えた以外は2024年3月31日時点のものをそのまま使用しています。青空文庫の「青空文庫収録ファイルの取り扱い基準」

(<https://www.aozora.gr.jp/guide/kijyunn.html>) に書かれている

通り、青空文庫は再配布を認めているので権利的には問題ありません。

配布する作品としては、宮沢賢治の「やまなし」と芥川竜之介の「鼻」と太宰治の「美少女」を選びました。どれも、文化祭中にさつと読むことができる、短い小説です。選定については、誰が読むのかを意識しました。以下、詳細な経緯です。

灘校の文化祭には小学生のお客さんが多くいるので、読みやすいものを選ぶ必要があります。しかし、昔の小説には堅いものが多い、当時の風俗や価値観を知らないと言われるに多くの注が必要なものもあります。そこで、宮沢賢治の児童文学から「やまなし」を選びました。情景が細かく、また考えさせる余白が大きいことから、小学生の純粋な心には読みやすい部分もある作品だと思います。

次に、ある程度成熟した小学生高学年以上のお客さんを想定しました。普段小説を読まない人にも読んでほしいので、芥川竜之介の小説の中でもテーマがわかりやすい「鼻」を選びました。家族や友人とルッキズムについて話す機会にもなるかなと思います。また、言葉遣いで敬遠されるかもしれませんが、昔の文学に触れてもらう上で、難しすぎないちょうどいい言葉遣いの作品だと思います。

最後は、少しマイナーなものを探しました。前の2つはどちらも国語の教科書に載るような小説で、読んだことがある人が多いでしょう。なので、太宰治というネームバリューでとつきやすきさせながらも、「走れメロス」などと比べるとマイナーな「美少女」を選びました。また、「太宰治」という純文学を想像させるような人物に対して、「美少女」というゲームやアニメなどを連想するタイトルがギャップを誘い、手に取りやすいと考えました。

以上で、企画内容の説明を終わります。真似したいという方は、ぜひ参考に見てみてください。

次に、企画の意義を説明します。

みなさんは「積み本」というのをご存知でしょうか。買ったたり借りたりしても、読まずにおいてある本のことです。このような言葉ができるくらい、本を読みたいのに読まない人が多いのです。

昨今、ソーシャルゲームなど長時間遊べる娯楽が増えた事によって、一種の娯楽である読書の時間を取りづらくなりました。何も考えずに楽しめるゲームと比べて、考えることが多い読書は、おろそかにされがちです（経験談）。しかし、そんなのもったいない！

そこで、読書を最近全然していない、という人に読書の楽しさを感じてもらおうと思い立ちました。これが、この企画の目的になります。

先ほど触れた「青空文庫」も同じような目的を持っています。青空文庫では、気軽にウェブサイトアクセスすることで数え切れないくらいの文章が読めます。しかし、やはりURLだけでは読もうという気が起きないのが事実。この企画のように、印刷してはいいとその場ですぐ読めるような短い小説を渡してしまうのが読んでもらうのが確実なのではないでしょうか。

企画が成功するかは今この記事を書いている段階ではわかりません。ですが、一人でもこの企画を通して本を手にとった方がいればとても嬉しいです。

・追記

せっかくなので、こちらにも一作だけ昔の小説を載せることにしました。次のページより夢野久作「ビール会社征伐」です。ぜひお読みください。

ビール会社征伐

夢野久作

毎度、酒のお話で申訳ないが、今思ひ出して腹の皮がピクピクして来る左党の傑作として記録して置く必要があると思う。

九州福岡の民政系新聞、九州日報社が政友会万能時代で経営難に陥っていた或る夏の最中の話……玄洋社張りの酒豪や仙骨がズラリと揃っている同社の編集部員一同、月給がキッチンキチンと貰えないので酒が飲めない。皆、仕事をする元氣もなく机の周囲に青褪めた豪傑面を陳列して、アフリアフリと死にかかった川魚みたいな欠伸をリレーしいしい涙ぐんでいる光景は、さながらに飢饉年の村会をそのままである。どうかして存分に美味い酒を飲む知恵はないかと言うので、出る話はその事バツカリ。そのうちに窮すれば通ずるとでも言うものか、一等呑助の警察廻り君が名案を出した。

今でも福岡に支社を持っている××麦酒会社は当時、九州でも一流の庭球の大選手を網羅していた。九州の実業庭球界でも××麦酒の向う処一敵なしと言う位で、同支社の横に千円ばかり掛け

た堂々たる庭球コートを二つ持っていた。

「あの××麦酒に一つ庭球試合を申込んで遣ろうじゃないか」

と言うと、皆総立ちになって賛成した。

「果して御馳走に麦酒が出るか出ないか」

と遅疑する者もいたが、

「出なくともモトモトじゃないか」

と言うので一切の異議を一蹴して、直ぐに電話で相手にチャレンジすると、

「ちょうど選手も揃っております。いつでも宜しい」

と言う色よい返事である。

「それでは明日が日曜で夕刊がありませんから午前中にお願ひしましょう。午後は仕事がありますから……五組で五回ゲーム。午前九時から……結構です。どうぞよろしく……」

という話が決定した。麦酒会社でも抜け目はない、新聞社と試合をすれば新聞に記事が出る……広告になると思ったものらしいが、それにしてもこっちの実力がわからないので作戦を立てるのに困ったと言う。

困った筈である。実はこつちでもヒドイ選手難に陥っていた。モトモトテニスらしいものが出来るのは、正直のところ一滴も酒の飲めない筆者の一組だけで、ほかは皆、支那の兵隊と一般、テニスなんてロクに見た事もない連中が吾も吾もと咽喉^{のど}を鳴らしで参加するのだから、鬼神壮烈に泣くと言おうか何と言おうか。主將たる筆者が弱り上げ奉ったこと一通りでない。

「オイ。主將。貴様は一滴も飲めないのだから選手たる資格はない。俺が大將になって遣るから貴様は退^のけ。負けたら俺が柔道四段の腕前で相手をタタキ付けて遣るから。なあ」

と言うようなギャング張りが出て来たりして、主將のアタマがすっかり混乱してしまった。仕方なしにそいつを選手外のマネージャー格に仮装して同行を許すような始末……それから原稿紙にテニス・コートの図を描いて一同に勝敗の理屈を説明し始めたが、真剣に聞く奴は一人もない。

「やってみたら、わかるだろう」

とか何とか言ってドンドン帰ってしまったのには呆れた。意気既に敵を吞んでいるらしかった。

翌る朝の日曜は青々と晴れたステキな庭球日和であった。方々から借り集めたボロラケットの五、六本を束にした奴を筆者が自身に担いで門を出た時には、お負けなしのところ四条畷^{なわて}に向つた楠正行^{まさつち}の気持がわかつた。それから麦酒会社のコートに来てみると、新しくニガリを打って眩い白線がクツキリと引き廻して在る。その周囲を重役以下男女社員が犇^{ひしひし}々と取り囲んで、敵選手の練習を見ている処へ乗り込んだ時には、何かなしに全身を冷汗が流れた。早速の機転で、時間がないからと言って、こつちの選手の練習を謝絶した。

作戦として筆者の主將組が劈頭^{へきとう}に出た。せめて一組でも倒して置きたい。アワよくば優退を残せるかも知れないと言う、自惚まじりの情ない簡であったが、見事にアテが外れて、向うも主將の結城、本田というナンバー・ワン組が出て来たのには縮み上った。それだけで手も足も出ないまま三〇のストレートで敗退した。後のミットモナサ……。あんなにもビールが飲みたかったのかと思うと眼頭が熱くなるくらいである。

先方は揃いの新しいユニフォームをチャンと着ているのに、こ

ちらはワイシャツにセイラ・パンツ、古足袋、汗じみた冬中折れという街頭のアイスクリーム屋式が一番上等で、靴のままコートに上って叱られるもの。派手なメリンスの襦袢に赤い猿又一つ。西洋手拭の頬冠りというチンドン屋式。中には上半身裸体で屑屋みたいな継ぎハギの襦袢股引を突込んだ向う鉢巻で「サア来い」と躍り出るので、審判に雇われた大学生が腹を抱えて高い腰掛から降りて来るようなこと。むろんラケットの持ち方なんぞ知ってという筈がない。サーブからして見送りのストライクばかりで、タマタマ当たったと思うと鉄網越しのホームラン……それでも本人は勝ったのか敗ったのか解らないまま、いつまでもコートの上でキョロキョロしている。悠々とゴムを拾ったり何かしているので、相手がコートに匍はい付いて笑っているが、それでもまだわからない。

「ナアーンダイ。敗けたのか」

と頬を膨らましてスゴスゴ引き退るトタンに大爆笑と大拍手が敵味方から一時に湧き返るといふ、空前絶後の不可思議な盛況裡に、無事に予定の退却となった。

それから予定の通りにコート外の草原のテント天幕張りの中でビールと抓み肴が出た。小使が二人で五十ガロン入の樽を抱えて来た時には選手一同、思わず嬉しそうな顔を見合わせた。同時に主将たる筆者は胸がドキドキとした。インチキが暴露ばれたまま成功したのだから……。

「ええ。樽にすると小さく見えますがね。この樽一つ在れば五十人から百人ぐらいの宴会ならイツモ余りますので……どうぞ御遠慮なくお上り下さい」

と言う重役連の挨拶であったが、サテ、コップが配られると、さあ飲むわ飲むわ。筆者を除いた九名の選手と仮装マネージャーが、文字通りに長鯨の百川を吸うが如くである。

「ちよつと、コップでは面倒臭いですから、そのジョッキで……」

と言うなり七合入のジョッキで立て続けに息も吐かせない。

「お見事ですなあ。もう一つ……」

と重役の一人が味方の仮装マネージャーを浴びせ倒しに掛かっていたが、ナカナカ腰が砕けない模様である。そのうちに樽の中

が泡ばかりになりかけて来ると、重役連中が一人逃げ二人逃げ、しまいには相手の選手までいなくなって、カンカン日の照る草原に天幕と空樽と、コップの林と、入れ代り立ち代り小便をする味方の選手ばかりになってしまった。中にも仮装マネージャーを先頭にラケットを両手に持った三人が、靴穿きのままコートに上って、

「勝った方がええ。勝った方がええ」

とダンスを踊っている。何が勝ったんだかわからない。苦々しい奴だと思っている筆者を皆して引っぱって、重役室に挨拶に行った。仕方なしに筆者が頭を下げて、

「どうも今日は御馳走様になりました」

と言って切り上げようとする、背後から酔眼朦朧たる仮装マネージャーが前に出て来て、わざとらしい舌なめずりをして見せた。銅羅声を張り上げた。

「ええ。午後の仕事がありませんと、もっとユックリ頂戴したかったのですが、残念です」

と止刺刀とどめを刺した。

しかし往来に出るとさすがに一同、帽子を投げ上げラケットを振り廻して感激した。

「××麦酒会社万歳……九州日報万歳……」

「ボールは子供の土産に貰って行きまアス」

翌日の新聞に記事が出たかどうか記憶しない。

底本：「夢野久作全集」三一書房

1970（昭和45）年1月31日第1版第1刷発行

1992（平成4）年2月29日第1版第12刷発行

初出：「モダン日本 6巻8号」

1935（昭和10）年8月

入力：川山隆

校正：土屋隆

2007年7月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫](http://www.azora.gr.jp/)

[\(http://www.azora.gr.jp/\)](http://www.azora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

「突き抜けていること」について

さぼてん

風呂上がりに体重を測ってみたら、55キロだった。私の身長は173cm、適正体重が65.8kgだということだから、かなり軽いことになる。128kgも差があるのだ。……ああ、私の128kgはいったいどこにいつってしまったのだろう！私の128kgは今頃何をしているのだろう！……そんなことを考えていて、ふと、私に欠けている128kgは「自信」だったのではないか、と思い至った。私にはほとんど自信がない。というより、なくしてしまった、と言った方が適切かもしれない。かつて私に溢れていた自信は、おそらくある時点で完全に欠落してしまったのだ。そして、その自信の欠落というのは、もしかしたらこの灘という学校と少なからず関連しているのかもしれない。

小学校のころ、私は自信に溢れていた。勉強は他人よりできたし、(逆上がりのをのぞけば)運動もそこそこできた。友人もたくさんいた。知り合いの大人にはえくぼが素敵だと言われた。全くと云っていいほどモテなかったが、そこまで気にならなかった。そういった生活を送っていたから、自信が生まれるのも当然だったと思う。自信といっても、それは他者に対する優越感だとか自分の能力に対

する過信だとか、そういった類のものではなかった。……いや、多少はあったかもしれない。少年時代特有のナルシズムに陥っていたような気はしなくもない。とはいえ、あの頃は、自分が必要とされている、という感覚が確かにあつて、それが嬉しかったのだ。自分がいなければ崩壊する部分というのが確かにこの世界にはあるのだと、自分はこの社会を動かしていく歯車の一つなのだと、そんな自意識の塊を抱えたまま、私は小学校に通い、中学受験を迎え、幸運なことに合格をいただき、この学校に入学した。

……そしてその先に今の私がいる。自信はどこかに消え失せ、SNSに蔓延るニヒリズムに染め上げられ、そのくせ徹夜すること、エナジードリンクを飲むこともないまま卒業しようとしている、ほとんど抜け殻のような、無気力な、……言い過ぎだろうか。言い過ぎかもしれない。ただ、小学校時代に持ち合わせていた自信は、今はもうあまり残っていない。冗談交じりにナルシストだと呼ばれるようなことはもうないし、成長に伴ってえくぼは顔に埋もれてしまった。

灘校という環境は素晴らしい。信じられないくらい特定の学問に長けている人にも、塾の勉強に打ち込む人にも、あるいは自分の趣味に全力で打ち込む人も、皆がお互いを尊重しあっている、非常に居心地のいい空間である。実際のところこれは事実だと思うし、

また学校説明会なんかでも必ずと言っていいほど強調される部分である。「変わり種が多い学校」「ある分野においてずば抜けた才能を持つ生徒の集合」が灘校の特徴である、とされている（ように少なくとも私には思える）のだ。ただ、このような考え方が一部の生徒を苦しめているのもまた事実だと思う。「どの分野においても突出したものがない」という灘校生も、確かに存在すると思うのだ。「何かにおいて突出している」ことが灘校生の定義であるとする従来の考え方は、そうでない者たちのアイデンティティーを侵しかねない。灘校というのは極めて特異な環境である。数多の才能に溢れかえっている灘校という箱においては、きわめて高い能力を持つている者でも、相対的に「凡庸」となってしまうかねないのだ。

ここでポイントになるのが、いわゆる「オールラウンダー」の存在である。灘校にいと、「天は二物を与えず」という言葉がいかに嘘くさいものであるか、ということを実感する。「オールラウンダー」は、「突出したもの」をいくつも持っているのだ（もちろん、後天的に、努力して身に着けた才覚も多いことだろう。ただ、それを差し引いても、彼らの才能の先天的な部分に打ちひしがれてしまうことは多い）。文武両道、才色兼備、そういった言葉で言い表すこともできるだろう。そのような「オールラウンダー」の存在は、「凡庸」な者にとってある種の苦しみとなりかねない。どれだけ努

力しても、決して追い越せない存在がいたとき、自分の無力さを自覚するものである。灘校には、そのような存在が、たくさんいるのだ。自分の「完全なる上位互換」が周りにうじゃうじゃ居るのである。そうなったときに、「凡庸」な者たちにとって、自分が灘校生であるという事実は、ときに「突出しなければならぬ」という強迫観念となってしまうのではないか。そして、最終的に「突出すること」が無理だと悟ったそのとき、自信と言うものはきれいさっぱり消えてしまうのではないだろうか。

もちろん、灘校という環境は寛容であって、「凡庸」な者であっても楽しく過ごせるようになっていく。けれども、灘校生でありつづける限り、アイデンティティーの不安というのは必ず付きまわってくる。

とはいえ、私はこの「凡庸」な者が生まれてしまう環境を批判したいのではない。灘校という多彩な環境は本当に素晴らしいと思うし、憧れを抱いてしまうほどの才能を持ち合わせた友を得ることができる環境は他にあまり類意を見ないものだと思う。そもそも思春期という多感な時期に時期において、だれしもこのようなことは経験するものかもしれない。また、「他者と比較することでは自分の価値を測れない」というのが少々貧しい考え方であるのも事実だろう。それは勿論だ。

ただ、ここで私が主張したいのは、「灘校」という環境があまりに一方的に語られてはいしないか、ということだ。例えば、「灘校は突出いた人が沢山いますから、『この分野はこいつには適わない』といったことがよくあるわけですね。ですから、傲慢になることがないんですよ」といった議論はよく成されているし、灘校の共通認識になりつつある。しかし、「傲慢になることがないというのは、裏を返せば自信の喪失と結びつきかねない」といった主張が提示されたことは果たしてどれくらいあっただろうか。少なくとも、私が入学して以来、このようなことが生徒会などの公の場で俎上に向かったことはない気がする。別に、議論してほしいと言っているのではない。ただ、光の部分あけでなく、影の部分にも、もう少し目を向けてほしいのだ。そして最終的に、「突き抜けているのはいいことだけれど、灘校生といえども必ずしも突き抜けている必要はない」という考えが、少しずつでも定着していったら嬉しいな、とも思っている。

僻みと愚痴が少々入り込んだ文章になってしまいましたが、ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

雑誌「タラバガニ」創刊号

二〇二四年五月二日 初版

編集者 加藤湊人

渡邊広脩

表紙 ちえけら

発行 文化祭サークル「タラバガニ」

印刷 灘校生徒会

製本 文化祭サークル「タラバガニ」

非売品

無断転載及び転売を禁じます

